2003 年・カンボジア選挙監視レポート

石原広恵（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

私はカンボジア、第二の都市、バッタンバン、中でもモングルサイという村で選挙監視を行った。選挙当日までは、ロング・ターム・オブザーバー（以下 LTO）の方がすでに設定していたインタビューをこなしたり、選挙キャンペーンの様子などを見に行ったりし、当日は、実際の投票のプロセス、開票のプロセスを監視した。

最初のほうで行った候補使者たちとのインタビューでとくに印象的だったのは、野党の候補たちが公然と与党を批判する姿であった。彼らは口々に与党のカンボジア人民党（以下 CPP）は、票をお金で買っている、あるいは投票用紙には蝋などが塗ってあり、自分たちの党のチェックランにはインクが付かないようになっている、あるいは時間が経つと消えてしまうペンを野党の支持者にはわたすので、その投票が無効になるだろうなど、様々な苦情を私たちに述べた。どこまで事実であるかは疑わしい点は多々あったものの、実際、CPP は巧妙な手を使って票の買収を行っていたようである。しかし私が驚いたのは、野党の候補たちが与党を堂々と批判している姿に対してである。私の研究対象としている中東地域では一党独裁が強いため、野党といえども公然と与党の不正を批判するような姿はまず見られないことであったからだ。この点で、多少の脅迫や買収があるにしても、人々が自由に選挙できる環境にあるのだと、実感した。

と同時に、インタビューを通じて、国際選挙監視という行為そのものが、選挙キャンペーンの一部になっているという事実も痛感した。野党の候補たちは、完全にうそではないにしろ、うわさ程度のことを誇張して、国際選挙監視団に語ることにより、国際社会でのプレゼンスを高め、国内での選挙を少しでも有利に展開させようと必死なのだ。事実、野党の候補には我々のインタビュー大歓迎されたが、与党 CPP の我々に対する態度は冷めたものがあった。

インタビューに対する態度と同様に、キャンペーンの最終日、金曜日（25日）に選挙キャンペーンを見に行ったが、与党選挙キャンペーンと野党のそれは、対照的であった。CPP は大会場にテントを連ね、整然と演説などを行ってはいたが、どこか人々にはよそよそしさが残っていた。多くの人々は候補者や党幹部の演説にはそれほど耳を傾けていないようだった。それに対して、野党、とくにサム・レンシー党の選挙キャンペーンは土砂降りの雨の中にもかかわらず、長いバイク隊やトラック隊を連ね、人々は口々にサムランシーの名を叫び、大変な熱気であった。人々は口々に、変革を求めていた。また、フンシンペック党も、人数の点では他の二党にはひけを取っていたが、それでも CPP にはない活気があった。

選挙当日、開票日を通じて、私が監視した地域では、小さい手違い、例えば窓から投票用紙を記入している投票者が丸見えで、秘密選挙となっていないなどといった類の手違いはいくつかあったものの、概ね、公正な選挙プロセスであったと思う。それでも、一つの投票所では投票が行われている間中、投票所となった小学校の敷地内に、村長と警察官たちとたむろしているなど、明らかにカンボジアの選挙法に触れる行為もあった。加えて、その村長は、投票箱を開票所まで運ぶなど、本来彼の権限下にないことをしていたのでそこでは注意は促した。しかしながら、開票結果にはとくに他

の投票所との差はなく、そこでは CPP ではなく、サムランシー党が優位であったので、村長の存在がどれほど選挙結果に影響を及ぼしたかは不明である。

開票作業は、コミューン・レベルの選挙委員（以下 CEC）が不慣れな点も多く、非常に時間がかかった。とくに気になったのは、密封しておかなければならない余りの投票用紙などが、密封されて保管されていない点である。その他は、開票作業中も党の代表者と現地の NGO の監視員も列席し、彼らにも投票用紙が見えるように開票していたので、大きな問題はなかったと言えるだろう。

今回の選挙監視全体を通じて私はカンボジアには比較的大きな政治的な自由があることを感じました。野党は自由に選挙キャンペーンを展開し、票の買収や多少の脅迫があるにしろ、人々も比較的自由な環境で党を選択している姿を見ることができてよかったと思う。また、国際社会、とくに国連や他国の政府ではない、市民社会が民主化のプロセスにこのような形で貢献できるということを知ったことは、私にとって大きな喜びでした。